



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	日本アニメーションの表現性に関する研究：東アジアにおける受容を交えて〔全文の要約〕
Author(s)	靳，麗芳
Description	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。 https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第11950号
Issue Date	2015-09-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/59930
Type	doctoral thesis
File Information	Lifang_Jin_summary.pdf



学位論文題目

日本アニメーションの表現性に関する研究

——東アジアにおける受容を交えて——

靳 麗芳

学位論文要旨

本論文は、主に 1980 年代以降の日本製アニメーションを研究対象に、「日本アニメーションの表現性」を軸として、二つの視点から総合的に論じたものである。

一つ目は、作家・作品論の視点である。日本アニメーション表現論の理論的構築の一環として、アニメーション監督の演出方法や作品の内容など表現面の特徴に焦点を当て、それぞれの監督の作家性を明らかにしようとするわけである。二つ目は、受容論の視点である。サブカルチャーとしての日本アニメを受容の角度から考察し、中国大陆、台湾など東アジア諸国・地域における受容の現状及び影響を明らかにするのである。

前者については、おもに押井守、今 敏、細田守など個性的で作家性の強いアニメーション監督の長編作品を中心に挙げた。それに対し、後者の受容論においては、長編アニメーション映画に限らず、テレビアニメを含む日本アニメ全般を視野に入れて、その受容と影響を考察した。

作家・作品論の部分であえて宮崎駿を研究対象から除外し、押井守、今 敏、細田守を取り上げることにした理由は、次のようなものである。日本では三十数年来、いわゆる「宮崎アニメ」は注目されてきており、国際舞台でも眩しい脚光を浴びている。しかし、アニメーション作品を地道に作り続けており、宮崎駿とともに日本アニメの今日の世界的地位を築いた（あるいは、築きつつある）アニメーション監督と優れた作品は、他にも多く存在している。彼らは、世界では日本アニメの名手として注目されているにもかかわらず、日本国内では専門者とアニメ愛好者以外には、さほど知られていない。また、研究者による彼らに関する研究論文も限られたものであり、宮崎駿に関する研究の数と比べて雲泥の差がある。日本アニメの研究におけるいささか過熱気味にも見える「宮崎ブーム」は、アニメーション研究全体にとっては、必ずしもいいこととは言えない。研究対象が偏ってしまうと、学問に多様性が欠けるようになってしまうからである。

一方、筆者が受容の研究も視野に入れており、テレビアニメなど商業系アニメを中心に

サブカルチャーとしてのアニメの受容を考察した理由は、以下のようなものである。

上に挙げた個性的アニメーション作家たちの存在は、日本アニメの芸術的な水準の維持には必要不可欠であり、彼らの作品を研究することは大きな意味を持っている。しかしその一方で、日本のアニメーションを見ている、消費している人たちのこと、いわば受容の現場の状況に目を向けると、日本アニメの今日の繁栄を築いたのは、必ずしも上記のような芸術水準が高いとみられる劇場用作品に限らず、長らく軽視されてきたテレビアニメも、極めて重要な役割を果たしていることが分かる。むしろ、大量生産された安価なテレビアニメ作品が世界各国に輸入されたことが、世界中で日本のアニメを見て育つ堅実なファン層を産み出し、今日の繁栄につながったと言ったほうが正しい。

したがって、テレビアニメ、OVA（オリジナル・ビデオ・アニメ）など商業系アニメの存在を無視して、それを抜きに日本アニメーションの研究を進めることは、無理が生じてくる。なぜなら、巨匠宮崎駿にせよ、本論で取り上げる押井守や今 敏、細田守にせよ、またほかに取り上げていない多くのアニメーション映画作家にせよ、彼らのほとんどはテレビアニメの製作に携わったことがあり、テレビアニメシリーズの延長線上にある劇場版アニメーション映画を創った経験を持つからである。

要するに、本研究の関心はあくまで、世界中で評価され、愛されている現代日本アニメーションの全体について包括的で複眼的に考察することに向けられているのである。

本論文は、次のように構成されている。

第一部 作家・作品論は、第一章から第五章までの五章からなっている。

この部分は、作品分析を中心に据え、現在日本では芸術的にも認められており、アニメファンにも支持されている前述の監督たちの代表的な作品を対象に、作品のテーマや、映像・音声による表現技法などに注目して分析した。

その中で、第一章と第二章で取り上げたのは、押井守監督の作品である。押井守は、宮崎駿監督とまるで正反対にみえるようなスタイルでアニメーション映画を製作しており、アニメーションに関しては独自の思想と方法論を持っている。押井守が「映画監督」として、どのような作品を作ったのか、その作品群にはどのような表現性がみられるのか、それについての考察は、第一章で行われた。そこでは、まず押井守のキャリアと作品を概観したうえで、情報量の多い背景描写、アンチ伝統的なスタンス、風景のなかを彷徨う人物、アニメーションの限界への超克といった四つの視点から作品の映像を分析し、次に、声優の声、伴奏音楽及び音響効果といった三つの側面から作品の音声を考察し、映像と音声の両面から押井守のアニメーション作品の表現性を探った。

第二章では、世界範囲で押井守の映画界とアニメーション業界での不動の地位を築いた作品『GHOST IN THE SHELL／攻殻機動隊』（1995）及びその続編『イノセンス』（2004）を

詳細に考察した。第一節では『攻殻機動隊』を中心に提起し、作品における「機械」の表象、及び表象機械としてのアニメーションという表現様式について論じた。第二節では、さらに『イノセンス』を考察対象に加え、押井守作品における「アジア」の表象について分析を行った。『攻殻機動隊』などの作品で押井守は「テクノ・オリエンタリズム」を内面化していると指摘されているが、筆者はその映像をつぶさに考察することによって、従来の指摘とは異なる見方を示した。

続く第三章は、今 敏の作品についての考察である。1997年に『PERFECT BLUE』でアニメーション監督デビューを果たした今 敏は、その短い生涯の限られた作品の中で、一貫して夢というモチーフを扱い、現実と虚構の曖昧さを描き続けた。そして、サイコサスペンスにせよ、ファンタジーにせよ、今 敏は常に「お約束」へ抵抗する姿勢を示し、カテゴライズしにくい作品を作り続けた。彼の作品に頻出する虚実混交の物語世界がいかにか構築され、表現されたのかについて、本章では、今 敏の遺作となった『パプリカ』を取り上げて、主に、「映画」、「フレーム」、「リズム」という三つのキーワードをめぐって、この作品にみられる実写映画との深い関係性、及び演出方法を考察し、『パプリカ』という作品を通して、今 敏の演出の特徴を検討した。

第四章では、現在「ポスト宮崎駿」とも呼ばれ、注目を集めている細田守監督の作品を対象に、日常に宿る「異郷」という切り口からその表現性を考察した。細田守は、2006年の『時をかける少女』で成功を収めて以来、ここ数年は、アニメーション業界のみならず、映画界からも賞賛を浴びるようになった。本章では、彼の『サマーウォーズ』（2009）と『おおかみこどもの雨と雪』（2012）の二作を取り上げ、そこにおける「異郷」の表象について検討した。この二つの作品におけるある人物たちは、場所としての故郷にとどまりつつも、既成の制度や規範や観念といったものから解放された「異郷」に行くことになる。それについて映像に即して詳細に分析し、この二作品が観客に示している自由な生の可能性を指摘した。

そして第五章では、庵野秀明監督の『新世紀エヴァンゲリオン』（1995年のテレビアニメ版と2009年の劇場版）とテレビアニメ『蒼穹のファフナー』（羽原信義監督、2004）を中心に、日本のアニメーションにおける音声の機能について論じた。アニメ作品の主題歌や背景音楽、音響効果及び声優の声がいかにか作品の内容と関わっており、機能しているのかを考察することを通して、日本のアニメーションが音声的音響的要素に強く依存していることを検証した。

第二部 受容論

第二部は、日本アニメーションの受容についての議論であり、第六章から第八章までの三章からなっている。

まず、第六章では、日本のアニメが隣国の中国で受容される過程、いわば受容の歴史を時系列に沿って考察した。日本のアニメーション作品が中国に伝わったのは、中国国内の文化大革命が完全に収束し、「改革開放」政策に転じ、新たな時代に向けて歩みだした1980年～1981年のことである。その記念碑を作ったのは、当時日本では批判的に捉えられた、手塚治虫監督の『鉄腕アトム』である。本章では、1980年代、90年代に中国で放送された日本アニメを統計的にみたうえで、90年代中国に輸入された一つの重要な作品『聖闘士星矢』を取り上げ、日本アニメが中国に進出した際、メディアの変遷とともに生じた受容形態の変容を明らかにした。

第七章では、2000年代後半中国における日本アニメの受容状況に焦点を当てた。その代表格は、中国に現れた「御宅族（オタク）」である。「御宅族」は、「萌」「宅男」「腐女」「干物女」などの言葉と共に新語として現われ、中国のオタク文化のキーワードとして若者の間で流行し定着した。また、1980年以降に生まれた世代を指す言葉である「80後」^{バーリンホウ}も、中国の社会状況や流行文化を論ずる時のキーワードとして頻繁に取り上げられるようになった。本章では、そういった状況を踏まえ、ポストモダンの中国社会における「御宅族」と「80後」といった社会的事象に注目し、それらの事象が日本アニメとどのように関係しているかを分析し、日本アニメの中国での受容状況を把握することを試みた。分析の手段としてはまず、「御宅族」が深く関わっているインターネットの世界に注目し、そこに現われた言説や現象を集めた上で、中国における「御宅族」の生態を考察した。次に、「80後」世代と日本アニメとの関係をめぐって、アニメなど日本のサブカルチャーが中国の若い世代に与える影響を論じた。また、幼少時から日本アニメを観て育った中国の「80後」世代が、日本文化に親近感を持っており、自身のライフスタイルもある程度影響されているということを、「80後」世代の代表的な人物へのインタビューを通して確認した。

そして第八章では、日本アニメの受容の一つの重要な現象として、声優について考察した。日本ではかつてアニメブームとともに幾度もの声優ブームが起こっており、近年は近隣の中国大陸のみならず台湾でも、「恋声族」と呼ばれる声優オタクが生み出された。この章では、まず日本における声優の歴史をたどり、声優ブームを概観した上で、日本アニメの声優が国境を越え、さらに言語の境界まで越え、東アジアないし欧米各国の若者の間で起こした「声優ブーム」の実態をみた。また、中国の声優オタク「恋声族」の、日本アニメとの関連性を指摘し、さらに台湾版の吹き替えアニメと台湾の声優が、日本アニメが中国大陸で受容される過程で果たした役割も探った。